

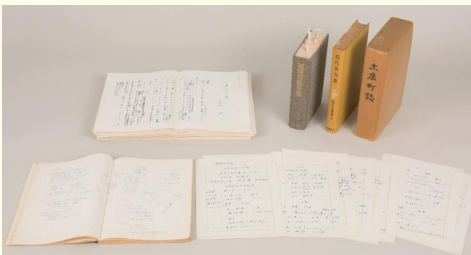
(左)吉村昭「海も暮れきる」執筆のころ

昭和53年 写真提供 筑摩書房



(右)尾崎放哉 須磨寺にて

大正13年ころ 写真提供 鳥取県立図書館



「海も暮れきる」に関する収蔵資料(一部)

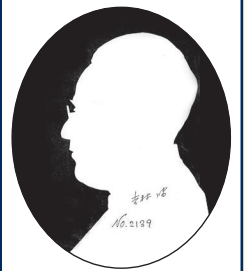
自筆原稿「海も暮れきる」や、自筆取材ノート、
自筆講演メモ、旧蔵書『尾崎放哉全集』など。

「こんなよい月を一人で見て寝る」咳
をして一人「入れものが無い両手で
受ける」などの自由律俳句で知られる
尾崎放哉(本名・秀雄 明治18年―大
正15年)。今日、広く親しまれる句の

会期・令和元年10月13日(日)〜12月18日(水)
吉村昭は、長篇小説『海も暮れきる』(昭和55年 講談社)で、自由律の俳人、
尾崎放哉の最晩年を描きました。この企画展では、初公開を含む収蔵資料と、妻
で作家の津村節子氏が所蔵する資料を中心にたどり、作品世界を読み解きます。
また、吉村と俳句の関わりについても紹介します。

令和元年度企画展
吉村昭「海も暮れきる」―俳人、尾崎放哉を見つめて―

吉村昭記念文学館 ニュース 万年筆の旅



vol.13

令和元年10月15日発行
登録番号(01)0037号
編集・発行/荒川区
問合せ/
荒川区地域文化スポーツ部
ゆいの森課
吉村昭記念文学館
〒116-0002
東京都荒川区荒川112-50-1
TEL.03-3891-4349

題字/津村節子氏
切絵/山崎達郎氏

【開館時間】
9時30分〜20時30分
【休館日】
毎月第三木曜日・特別整理
期間・保守点検日・年末年始他
【入館料】
無料

多くは、主に京都、神戸、福井の寺を
転々とした放浪生活と、最後にたどり
着いた香川県小豆郡土庄町の西光寺奥
の院南郷庵で詠まれたものでした。

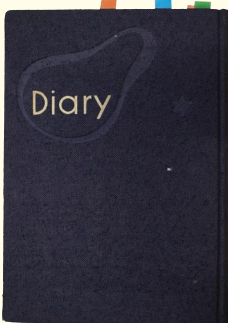
「海も暮れきる」は、昭和52年(1977
年)8月から2年4か月にわたり連
載(「本」講談社)されました。真夏の
小豆島に降り立った放哉が、春の訪れ
とともに死を迎えるまでの8か月に焦
点を当て、その生と死を描き出して
います。

この作品の根底にあるのは、自らと
同じ病を患い、生涯を終えた放哉の句
に対する深い共感です。中学2年で肋
膜炎を発症した吉村は、旧制学習院高
等科に進学した後、昭和23年、二十歳
の時に咯血し、死を強く意識した病床
で放哉の句にふれました。句に表れた
孤独感や、衰弱する体の変化、死に対
峙する心情などを「そのまま私自身の
もの」と感じ、衝撃を受けたと述べて

います(「私の好きな句」朝日新聞)平
成9年5月26日)。「海も暮れきる」で
は、自らの闘病体験を踏まえて、放哉
の内面を掘り下げました。

また、放哉の足跡を訪ねて取材を行
い、同門の俳人などに宛てた膨大な数
の書簡や、日記の調査を重ねました。
貧窮と病に苦しむ放哉を助けた土庄町
の住民や、俳人たち一人一人との関わ
りを細部まで描くことで、放哉の心の
動きを浮き彫りにしています。

吉村は、放哉の句に「死とはなにか
生とはなにかという問い」を見出しま
した(「光明を見る」放哉全集)内容見
本・推薦文 筑摩書房)。本展では、どの
ように放哉の実像に迫り、生と死の問
いを追究したのか、日記帳や旧蔵書の
書き込み、自筆資料の推敲跡をたどり、
読み解きます。また、展示室内で、小
説を原作としたドラマ「海も暮れきる
〜小豆島の放哉〜」(昭和61年 NHK)
より、吉村と、放哉を演じた俳優・
橋爪功氏のトーク映像を含むドラマ紹
介(約20分)を上映します。さらに、
吉村の句集「炎天」(昭和62年 私家版)
に関する資料も展示します。ぜひ、ご
観覧ください。



吉村昭の日記帳

昭和26年 津村節子氏蔵
好んだ小説や、文芸評論、
俳句などを丹念に筆写。

展示報告

◆証言映像の上映と館蔵資料展

「吉村昭と北海道 —北へ注がれる視線—」

会期：平成31年2月15日(金)～

4月7日(日)

場所：企画展示室

今年、明治2年(1869年)に北海道開拓使が設置されてから150年の節目の年にあたります。これを記念して、吉村昭と関係の深い北海道及びその作品を紹介する展示と、証言映像「北へ注がれる視線」吉村昭と北海道」の上映を行いました。ここでは、展示の内容について紹介します。

吉村昭と北海道について

吉村は、小説の取材のため全国各地を訪れましたが、最も多く訪問したのは北海道でした。その来訪回数は150回を超えます。それだけ多く訪れたのは、吉村自身が興味を抱く時代—江戸後期から明治—を描こうとすると、必然的に北海道へ眼が向いてしまうからだと随筆「五寸釘寅吉のことなど」【註1】の中で述べています。また、北への玄関口だった上野にほど近い日暮里に住んでいたため、「東北、北海道

へ足をふみ入れると一種の安息に似たものを感じる」【註2】とも綴っています。では、小説家、吉村にとって欠かすことのできない北海道とはどのような土地だったのでしょうか。

初めての夫婦の旅

昭和29年(1954年)、津村節子と結婚した翌年の秋に、吉村は初めて北海道の地を踏みました。結婚を機に始めた商売が行き詰まり、抱え込んだ寒冷地向けの衣類を売り捌くための東北・北海道への旅でした。途中からは津村も同行し、結婚後初めての二人旅でもありました。しかし、同じ場所を訪れたにも関わらず、それぞれが抱く旅の印象は大きく異なっていました。津村にとつては「望郷の思い」に胸が詰まり【註3】、吉村にとつてはすべてが新鮮で「旅そのものを楽しむ」気持ちで強い旅路でした【註4】。

後に、この旅は二人にとって大きな影響を与えることになりました。昭和39年、津村は東北・北海道への旅を題材とした短篇小説「さい果て」を発表し、新潮社同人雑誌賞を受賞しました。津村はこの作品について「デビュー作」と吉村との対談の中で語っています【註5】。一方の吉村にとつては、平原一良氏(現(公財)北海道文学館理事長)が「北への志向」を強めるようになった原点【註6】と位置付けたように、小説の題材として北海道を取り上げる契機となる旅でした。後年吉村は、「北海道

は魅力にみちた新天地であり、それ故に数限りない興味深い出来事が起つている」【註7】とし、戦争や医学、開拓、動物、漂流など様々な題材で、北海道を舞台とした作品を生涯発表し続けました。

ここでは数ある北海道関連作品のうち、「熊風」と「赤い人」を紹介します。

「熊風」—土に生きる

「熊風」は、大正4年(1915年)に、苫前郡苫前村の三毛別(現苫前町三溪)で起きた、人間がヒグマに襲われた事件を題材とした長篇小説です。数ある吉村の動物小説の中でも代表的な作品で、テレビドラマや演劇の原作としても取り上げられました。自然を切り拓き入植した人間たちと野性のヒグマとの対峙を通して、「人間と土」の関係に迫りました。

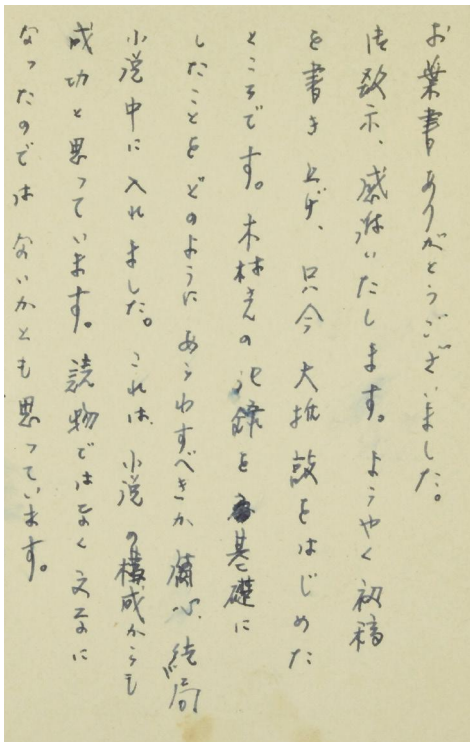
昭和46年、吉村は熊撃ち(猟師)に関する取材で、月に一度北海道を訪れていました。その過程で苫前の事件を知り、

後年、生存者の証言を集めて回るようになります。また、昭和49年には旭川宮林局の木村盛武

氏にも会い、氏の著作である「獣害史最大の惨劇苫前熊事件」を入手しました。手に入れたこの資料を基礎として「熊風」を執筆しました。

吉村は、「熊風」で書きたかったのは、「土である」と随筆「熊ノト—人間と土」【註8】で述べています。死者が出てもおその地に踏み止まろうとする人々と、戦時中に空襲被害に遭いながらも東京を離れることができなかった自分達の姿を重ね合わせていました。

この作品の執筆に吉村は大変苦しみました。事件があまりにも劇的で、小説として咀嚼することが至難だったためです。昭和49年夏に初稿を仕上げたものの、小説としての完成度に不満を抱き、さらに1年ほど時間をおいてから再度書き直して完成させました。初稿が完成した後に出した木村氏宛の葉書では、小説化することに「腐心」したと、胸中を吐露しています【写真1】。



【写真1】木村盛武氏宛の葉書
昭和49年8月4日消印

「赤い人」―明治時代の裏側を描く

「赤い人」は、明治14年、北海道の須部都太（現樺戸郡月形町）に開設された樺戸集治監（刑務所）を舞台とした長篇小説です。吉村にとっては、監獄をテーマとした初期の作品で、芸術選奨文部大臣賞や読売文学賞を受賞した「破獄」につながる重要な作品です。

厳しい自然環境の中、開拓作業に従事した囚人たちとそれを取り締まる看守との攻防、実在する脱獄常習犯の逸話など、明治時代の裏側を丹念に描きました。発表当時、書評では新時代である明治の暗部や残酷な開拓の秘史を描いたと評されました。

この作品が生まれたきっかけは、昭和47年10月、新聞社の依頼により紀行文を執筆するために石狩川周辺を訪れたことです。この訪問の時に、集治監があった月形町にも立ち寄り、町役場に勤務していた熊谷正吉氏に案内をしてもらいました。監獄ができたことで開かれた町が、今でも「集治監の匂いを濃く遺していることに強い感銘」を受け、帰りの飛行機の中で「集治監を中心とした小説」を書きたいと思った



【写真3】
自筆原稿「赤い人」
北海道立文学館蔵

と随筆「五寸釘寅吉―「赤い人」」註9)の中で述べています。月形町はもちろんのこと、府中刑務所や北海道立図書館、北海道開拓記念館などでの聞き取りや資料調査を重ねた後に、半年間かけて書き上げました【写真2】。

囚人たちが小樽に輸送された場面では、当初、北海道のことを「酷寒の地」としていましたが、校正で「容易に人の生存を許さぬ」という言葉を書き加えています【写真3】。



【写真2】
月形町にある囚人墓地にて
熊谷正吉氏と
昭和48年4月23日撮影
熊谷正弘氏蔵

北海道に始まり、 北海道に終わった夫婦の旅

その後も北海道を舞台とした小説が旺盛に書き続けていた吉村でしたが、平成17年（2005年）2月、舌ガンが見つかり、放射線治療を受けることになりました。治療を続ける一方で、

同年11月2日、北海道立文学館の開館10周年を記念して「私の小説と北海道」と題した講演を北海道で行います【写真4】。吉村はこの講演を引き受けるにあたり、平原氏の葉書で「女房には弱く、その時まで、女房の管理下で、体調乱れぬように、という日々です」と記しています。この旅には津村も同行し、親交があった作家、原田康子氏の特別企画展を見学しました。吉村・津村は、講演会前日に原田氏と平原氏と夕食を共にしましたが、病気のことは秘したままでした。そして翌年、新たに見つかった膵臓ガンのため、7月31日に帰らぬ人となります。夫婦にとって、この北海道への旅路が最後の旅となりました。

同年11月2日、北海道立文学館の開館10周年を記念して「私の小説と北海道」と題した講演を北海道で行います【写真4】。吉村はこの講演を引き受けるにあたり、平原氏の葉書で「女房には弱く、その時まで、女房の管理下で、体調乱れぬように、という日々です」と記しています。この旅には津村も同行し、親交があった作家、原田康子氏の特別企画展を見学しました。吉村・津村は、講演会前日に原田氏と平原氏と夕食を共にしましたが、病気のことは秘したままでした。そして翌年、新たに見つかった膵臓ガンのため、7月31日に帰らぬ人となります。夫婦にとって、この北海道への旅路が最後の旅となりました。



【写真4】札幌にて
平原一良氏(右)とロシア文学者で、現在
北海道立文学館の館長を務める工藤正廣氏(左)と
平成17年11月3日撮影 写真提供 平原一良氏

平成22年、北海道立文学館で吉村と北海道の強い結びつきを見据え、作家の魅力を探る試みとして、回顧展が開催されました。また今回、当館で企画した展示においても北海道から足をお

運びくださった方が大勢いらつしやいました。北海道の大地に眠る数々のドラマを掘り起こした吉村作品は、今後多くの人々に読み継がれていくことでしょう。

【註】1「史実を追う旅」平成3年文春文庫、2「石狩川」(「流域紀行」昭和48年朝日新聞社)、3津村節子「ふたり旅 生きてきた証しとして」平成20年岩波書店、4「トラバ蟹の記憶」(「味を訪ねて」平成22年河出書房新社)、5対談「心ひかれる北国の風景」(「ふたり旅 生きてきた証しとして」)、6平原一良「凝視と寛容 断章」(「吉村昭と北海道」展まで(財)北海道文学館編「吉村昭と北海道―歴史を旅する作家のまなざし」平成22年北海道立文学館、7「西より」(「北に親しみ」(「縁起のいい客」平成15年文藝春秋)、8「白い遠景 昭和54年 講談社、9「冬の海―私の北海道取材紀行」昭和55年筑摩書房

〈字芸員〉 加藤陽子

訃報

大村 彦次郎 氏

元講談社の編集者で、吉村氏とも懇意にしていた大村彦次郎氏が令和元年8月30日に逝去されました。区が主催した座談会や証言映像にご出演いただきました。

木村 盛武 氏

北海道庁で林務官を務め、吉村氏に「熊嵐」の基礎資料を提供した木村盛武氏が令和元年9月6日に逝去されました。ご自身の研究成果や吉村氏に関する資料を区にご寄贈いただきました。

ここに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

トピック展示開催報告

2階常設展示室の著作閲覧コーナーでは、当館収蔵の資料を中心に、学芸員の一手しとして、トピック展示を開催しています。

第3回は「吉村昭と東京開成中学校時代」、第5回は「吉村昭と学習院時代」について展示しました。

展示では、吉村昭の人生に大きな影響を与えた学生時代について取り上げ、その人物像に迫りました。ここでは、展示内容の一部を紹介します。

第3回 トピック展示

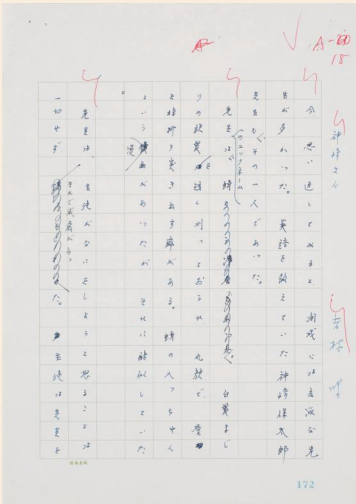
吉村昭と 東京開成中学時代 — 昭和20年の卒業生 —

会期：平成31年1月18日(金)

3月21日(木)



【写真1】卒業時、旧校舎の前で
昭和16年 津村節子氏蔵



【写真2】自筆原稿「神崎さん」 荒川区蔵
英語教師だった神崎保太郎先生のことを書いたもの。『俺たちの開成時代』（平成8年ペンケン20年同期会）に収録。

母校東京開成中学校（現開成中学校・高等学校）で過ごした日々や、卒業から40年後に行われた再卒業式について紹介しました。

東京開成中学時代

昭和15年（1940年）、吉村は東京開成中学校に入学します。学校は日暮里町（現西日暮里四丁目）にあり、自宅から近い馴染みのある学校でした。徒歩で日暮里駅の跨線橋を越え、諏方神社の脇を抜けて急な坂道を下り登校しました。個性豊かで優秀な教師と、教師に敬意と親しみを抱く生徒たちの中、自由な校風を感じながら学校生活を送りました。その様子は、同期会で製作した冊子に寄せた随筆からも窺い知ることができます（「写真2」）。

卒業した昭和20年までの間には、太平洋戦争開戦や、家族の死、助産院の発症などがありました。いつかは戦場へ赴き、そこで死ぬと覚悟する中で、漠然と造船技師や考古学者を夢みるこ

ともありましたが、当時は小説家になるとは考えもしていませんでした。

40年ぶりの卒業証書

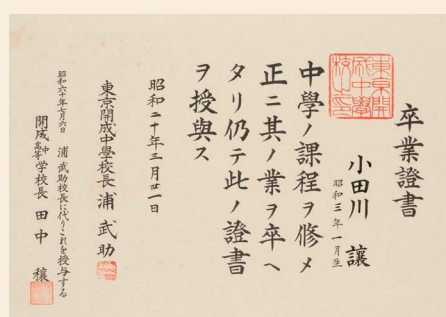
中学校時代の思い出が詰まった日々は、吉村の作品に繰り返し登場します。また、卒業後も講演会や授業参観のために、度々母校を訪れていました。

気心の知れた友人たちとの再会を心待ちにし、昭和20年卒業生の同期会へは毎年のように参加していました。終戦の年に卒業したため、吉村をはじめ友人たちのほとんどは、卒業式の記憶が無く、卒業証書も手元に残っていませんでした。しかし、友人の一人が同期会に証書を持って来たことから、それを複製し、卒業40周年の同期会で参加者に配ろうと、模擬卒業式の話が持ち上がりります。

吉村は、模擬卒業式を楽しみにしつつも、実際に卒業式が行われ、証書が全員に渡されたかどうか疑問を抱いていました。そこで、卒業者台帳や当時の校長の日記を見に母校を訪れ、卒業式が確かなに行われたことを確認します。その後、模擬卒業式を計画したいきざつを「四十年ぶりの卒業証書」として「オール讀物」（昭和60年6月号）に発表しました。

同期会が企画していた模擬卒業式は、当時の状況に特別に配慮するという学校の協力により、母校主催の再卒業式へと規模を大きくしていきます。昭和60年7月6日、母校の新校舎で、40年

ぶりに卒業証書が授与されました。卒業証書には、昭和20年と昭和60年の両方の日付とそれぞれの時期に証書を授与した2名の校長の名が記載されています。トピック展では、吉村昭の同級生で深い親交があった小田川譲氏所蔵の、昭和60年卒業証書を展示しました（写真3）。



【写真3】再授与された「卒業証書」

昭和60年 小田川譲氏蔵
小田川譲氏が、昭和20年に授与された卒業証書を持っていたことから模擬卒業式の計画が始まった。

第5回 トピック展示

吉村昭と学習院時代

会期：令和元年6月21日(金)

8月14日(水)

昭和22年の旧制学習院高等科入学から、結核療養後、同28年に学習院大学を自主退学するまでを紹介しました。大学在学中には、後に妻となる北原

学習院時代

(津村) 節子との出会いもありました。

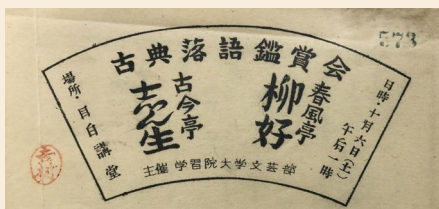
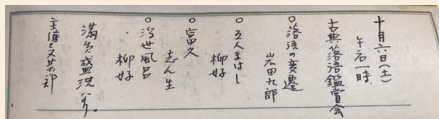
昭和20年、東京開成中学校を卒業した吉村は、終戦後に兄の会社を手伝いながら予備校へ通い、昭和22年(1949年)4月に旧制学習院高等科文科甲類に入学します。当時の日記帳には、鑑賞した作品の感想、友人の名前、英単語、俳文学の担当教授であった岩田九郎の句会で詠んだ俳句などが書き留められていました。

入学した年の秋、中学時代に患った肺結核が悪化します。絶対安静となり、昭和23年9月には、肋骨5本を切除する胸郭成形術を受けました。療養期間を経て、奇跡的に健康を回復した吉村は、手術から1年半後の昭和25年春、新制学習院大学文政学部の試験を受け入学しました。

在学中は文芸部や国劇部に所属する一方で、演劇研究会にも顔を出し、演出をしたこともありました。委員長を



【写真4】文芸部主催の古典落語鑑賞会
昭和26年 津村節子氏蔵



【写真5】(上)吉村昭の日記帳(昭和26年10月6日)

【写真6】(下)古典落語鑑賞会のチケット
津村節子氏蔵
日記帳の古典落語鑑賞会について記載された頁に、チケットが糊付けされている。

務めた文芸部では、同人雑誌の発行費用を補うために、大学の講堂を寄席に仕立て、落語家に出演してもらって古典落語鑑賞会を計画します。その後、利益金を使用し、ガリ版刷りの「学習院文芸」を、活版印刷の同人雑誌「赤絵」に刷新しました。学習院大学短期大学の学生で、後に妻となる津村節子と出会ったのも文芸部でした。

3年生への進級時に必修だった体育の単位を取れず、また小説を書く仲間であった津村の卒業もあり、昭和28年に自主退学します。同時に兄が経営する紡績会社へ就職しました。

「一日も長く生きたい」「註と願った闘病の日々をはじめ、津村節子、岩田九郎らとの出会いや、文芸部の活動を通して小説家への道を意識していったことなど、学習院時代には、吉村の人生に大きな影響を与える出来事がありました。

【註】私の文学漂流「平成4年新潮社

〈学芸員 北山ゆかり〉

開催報告

落語会

(出演：学習院大学落語研究会)

日時：平成31年3月17日(日)
場所：ゆいの森ホール

吉村昭ゆかりの学習院大学落語研究会による落語会を開催しました。当日は、落語3席の他、大喜利やお囃子もあり、会場には笑い声と拍手が響きわたりました。



全出演者による大喜利の様子



目白亭ぴけるさんによる落語の様子

吉村昭と落語

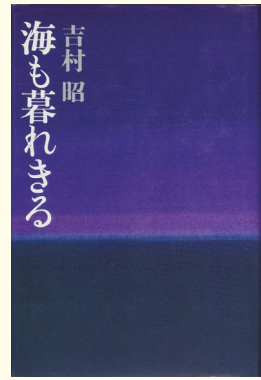
吉村は中学生の頃から落語に親しみ、学校帰りには上野の寄席に足繁く通っていました。学習院大学入学後に所属した文芸部では、古典落語鑑賞会を企画します。著名な落語家たちに二千元という破格の出演料で依頼をし、昭和26年10月に第1回目が開催されました。古今亭志ん生が「富久」、春風亭柳好が「五人廻し」「浮世風呂」を披露し、寄席に仕立てた大学の講堂は多くの学生で溢れ、大盛況でした。会は好評で、その後4回開催され、桂文楽、桂小文治、三遊亭円生、三笑亭可楽、柳家小さん、春風亭柳橋など、一流の落語家が出演しました。



講堂内に特設した高座の前で(昭和26年 津村節子氏蔵)
前列左から4人目が津村節子、その右後ろが吉村昭

著作紹介
第7回

『海も暮れきる』
第4回トピック展示
「吉村昭と俳句」の開催報告
を兼ねて



『海も暮れきる』
(昭和55年 講談社)

病勢が悪化してゆくのに、句が生色を増してゆく。自分の内部から雑なもの
がそぎ落されているような気がした。

咳をしても一人
なんと丸い月が出たよ窓
くるとりと剃つてしまつた寒ん空
庵の障子あけて小ぎかな買つてる
松かさそつくり火になつた
昔は海であつたと櫓をくべる
とつぷり暮れて足を洗つて居る
墓のうらに廻る
赤ん坊ヒトばんで死んでしまつた

『海も暮れきる』 昭和55年 講談社

「海も暮れきる」は、自由律俳句で知られる俳人、尾崎放哉（明治18年—大正15年）の最晩年を描いた作品です。執筆の背景には、吉村自身の肺結核やその後の療養生活、そしてその期間に触れた放哉の句が大きく影響しています。

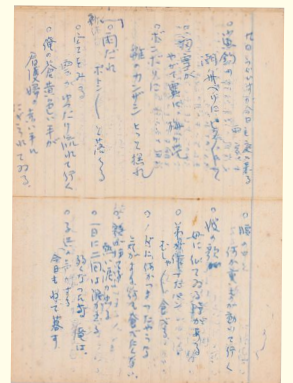
今回の著作紹介は、本年の3月23日（土）〜6月19日（水）に開催した第4回トピック展示「吉村昭と俳句」の開催報告と併せて、「海も暮れきる」の執筆背景を中心に紹介します。

俳句への関心 中学時代から俳句に興味を抱いていた吉村は、旧制学習院高等科に入学後、俳文学の講義を受けたことで、より一層俳句への関心を高めました。近代以降の俳人の句集を耽読したり、俳文学の岩田九郎教授が主催する句会に参加しては、句作を楽しみました。

結核療養中の句作 入学して8か月後の昭和23年（1948年）1月、中学時代に発病した肺結核が悪化し、同年9月、左胸部の肋骨5本を切除する胸郭成形術を受けました。手術は成功しましたが、健康を回復するまでに約1年半を要し、その間、自宅や栃木県奥那須温泉で療養生活を送ります。

療養中の日記「随想録」には、俳句に関する記述が多く見られます。句集やラジオ俳壇から書き写したのもありますが、特に目立つのが、毎日のように書き込まれた自作の句です。その多くが病床生活を題材にしており、当時の心情をつかがい知ることができま

す。「新体句」として吉村が自ら名付けた句を一部紹介します。
○電球に映つてゐる俺の小さいことへ入れて暖める
○生は一瞬である病になつて始めて知った



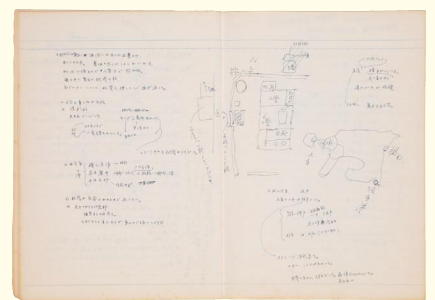
療養中の日記「随想録」
昭和24年 津村節子氏蔵

共感を覚えた尾崎放哉の句 療養中、吉村は眼に負担をかけないために、短文で構成された句集を好んで読みました。なかでも、同じ肺結核に罹つてこの世を去つた俳人、尾崎放哉に親近感を抱き、病床で詠まれたそれらの句に深い共感を覚えます。放哉の句一つひとつが「自分の内部に深くしみ入ってくるのを感じた」【註1】と述べています。

長篇「海も暮れきる」の執筆 昭和42年、吉村が40歳の時、雑誌「旅」（日本交通公社）に掲載する紀行文「小豆島浮ぶ箱庭の魅力」のため、初めて小豆島を訪れました。吉村は、放哉が晩年を過ごした南郷庵や関係者に宛てた夥しい数の書簡類を目にし、さらにその後もう一度小豆島を訪れたことで、放哉を書きたいという気持ちを募らせ

ます。しかし、42歳で死んだ「放哉の年齢を越えてからでなければ放哉という人物は分からない」【註2】という意識から執筆を諦めます。そして、50歳を迎えた昭和52年、これまでに収集した放哉関係の資料を改めて調査し、その足跡をたどり鳥取、京都、神戸、小豆島で取材を重ね、同年8月、雑誌「本

（講談社）で「海も暮れきる」の連載を始めました。タイトルは、海が好きだった放哉の句「障子あけて置く海も暮れきる」からとっています。この作品は、放哉が小豆島で死を迎えるまでの8か月間が描かれています。それは吉村が結核で「喀血し、手術を受けてようやく死から脱け出ることができた月日」【註3】とほぼ合致するものでした。放哉の死までの経過をたどることは、自らが体験した病やそれによって生じる死への恐怖を見つめ直すことでもありました。吉村は、放哉に託して、自分にとっての「病気というもの」【註4】を描いていったのです。



『海も暮れきる』の取材ノート
南郷庵の間取りなどを書き留めている。

第4回トピック展示「吉村昭と俳句」では、「海も暮れきる」に関連する資料のほかにも、この作品をきっかけに作成された句会「石の会」（のち「狐火の会」に改組）の資料や、吉村の還暦祝いに刊行した句集『炎天』の限定本などを展示しました。
【註1】3「あながき」「海も暮れきる」 昭和55年 講談社、24「尾崎放哉と小豆島」私の好きな悪い癖 平成15年 講談社文庫
〈学芸員 鈴木志乃〉